

私の軍隊記

兵庫県 信濃 勝

徴兵検査

昭和十六（一九四二）年六月二日、錦戸小学校講堂において神戸連隊区徴兵官瀬川政男中佐より「甲種合格」の申し渡しがあり、軍人として奉公することが決まった。入隊の日はまだ分からない。それまで家業の農業をやっていた。

入隊部隊

昭和十七年三月十日、入隊の通知が来た。満州国吉林省公主嶺満州第六〇一部隊に入隊のため広島市西練兵場に集合、その日は市内の西魚屋町亀屋旅館に宿泊する。現地部隊からは、後藤秀男准尉と新倉金三曹長ほか上等兵二人が引率者として来ていた。

昭和十七年三月十五日、広島を出発、夕方宇品栈橋より出港、三月十七日、朝鮮釜山港着、上陸。

まだ薄暗い早朝、行軍で西面廠舎へ入り、朝食を取り待機、十八日午後一時ごろ列車に乗り釜山を後に北上する。

二十日京城（ソウル）を通過、二十二日午前零時、鮮満国境を通過、そして鴨緑江鉄橋を渡る。正午下車し昼食を済ませてまた列車に乗り鳳凰城通過。二十三日奉天（瀋陽）を通過、夕刻となり真赤な大きな太陽が西の草原に沈むのを初めて見た。この光景は内地では見られない。

翌二十四日午前四時、真つ暗闇の中目的地である公主嶺駅に到着した。駅から百メートル余り東に公主嶺神社があり、ここに一同は武運長久を祈る。二キロほど徒歩にて闇の中を第六〇一部隊へと行進する。部隊の営門営庭には古年次兵、部隊幹部が出迎える中、まだ薄暗いが薄っすらと顔や身体が判明して来た。いよいよ軍隊入隊の第一歩を印す。

編成

各人名前を呼ばれた順に班編成に別れる。私は

第五班員として入室する。初年兵掛の高瀬秀雄上等兵の指導で室内に区分され、寝台は左右が二年兵の戦友に挟まれた中に自分の居所が決まる。手箱、食器から兵器に至るまで名前が付けられていて、受け入れ体制は用意周到に出来ていた。

当日は初年兵入隊祝として朝食は鯛の尾頭付きで十二、三センチものが付き、米麦混合、味噌汁、たくあん漬で、入隊最初の朝食が出来た。班長が班全員の顔合わせの紹介、官氏名を名乗って班長以下全員が朝食を共にし終わった。朝食後広島より支給着用の被服及び装具を返納して、隊内より支給された服装に着替えた。

公主嶺について

地名のごとく丘陵地満州を分断して南へ流れる遼河の支流の源流は、石武原、東より南、鉄南嶺に源を発し、延々と曲り、紆余曲折しながら渤海湾へ、また鉄崗嶺の東山地の伊通より源を発したる伊通川は、北上を続けながら新京（長春）の東を流れ、吉林より松花江となり、黒竜江に注ぎ、

樺太より太平洋に流入する南北分岐の高地である。交通は南満州鉄道の沿線にて、公主嶺、劉房子、花家屯、大屯を経て新京へ約六十キロ、また南の四平街へも六十キロの地点にあり、東西も南東も六十キロに伊通があり交通の要地である。

気候は、寒い冬季も氷点下二〇度を下る日は余りなく、概して南満は過し良い所であった。春五月、六月の風塵期には眼鏡が必要である。夏は三〇度を越す暑さでも木陰に入ると涼しく、日本のような湿度の高くないカラットした暑さで、夕食後に衣服を洗って干すと、二時間ぐらいで乾いて、点呼時には取込みができる。

夕暮れの時間の長い所で、また秋冬に木枯らしの吹くところは物哀しい風物の雪も余り降らず、風に吹きまくられ、約三十センチも積れば、それ以上は積らない。雨量も少なく、一年中過ごしやすい環境及び気候であった。

真つ赤で大きな夕日が地平線はるかに沈む光景は、約二年半過ぎた土地である公主嶺の大地や兵

舎と共に今でも眼底に焼付いて忘れられない。

部隊の環境は小さいながらも、部隊長以下将兵百余人、大隊規模の編成で、営内は第十二部隊と共にあり、約三百メートル四方を南北に二分し、東西百五十メートル余りの営内で四方を土塁で一メートルほどの高さに積み上げ、鉄条網を張り、小樹を植えてある。営門以外は外部へ開いた所が無く、外部からの侵入を防ぐような構築がなされており、外側には幅約二メートル、深さ一メートルの溝が掘られている。

兵舎は平屋の赤煉瓦造り、二重窓で下部は花崗岩が二メートルの高さに積み上げてあり、屋根はトタン葺き、防寒防暑の配慮がなされた立派な兵舎である。他の軍隊兵舎と比較し群を抜いた構築で、満州事変直後の陸軍が満州を支配する牙城として築いた様子がうかがえる。

車庫、兵器庫、器材庫、燃料庫、被服庫、将校集会所、下士官集会所、炊事場、酒保、浴場、食料庫、衛兵所等は皆同一基準で造られてあり、兵

舎側面に（二五九四）と作業年号（紀元年）が記してあった。ただし工兵の建物は若干後の作業が少々粗末な構築が目立った。

炊事は制毒隊と工兵隊が共同で同一釜の食事、食費は航空隊に次ぐ二等食だと、給兵曹長より聞いたことがあった。入浴は前段に工兵、後段に制毒隊と交互に入浴、衛兵は制毒隊、工兵一昼夜交代勤務で、営内区分なく外周、兵舎内、馬舎等を巡り、約一時間をかけての警戒警備の任に当る。また月ごとに交代して教導団本部の警備も歩兵、砲兵、工兵、制毒隊が交代で警備する。学校本部は主として歩兵が受け持っていた。

（衛兵の編成） 週交代での准士官以上が週番士官を務め、曹長がその任務に当る時もある。週番士官がその時の直属の上官である。

衛兵司令は下士官等の勤務兵長以上が任に当り、衛舎係上等兵は衛舎付近の清掃及び舎内、営倉の管理、全員の食事受領、雑務の長である。

（歩哨係上等兵） 営門外の歩哨の交代引率、

巡回、歩哨の交代、巡回経路の確認等に任じていた。

(歩哨) 一等兵、上等兵がこの任に当り、一般教育一期の検閲後進級した後この任に当り、昼夜を問わず二十四時間勤務、一時間交代で営門の口に立ち、出入者の監視、上官に対する礼、また部隊長入退営の時の連絡、整列の合図を行う。

一時間歩哨に立ち、終われば休息、後一時間は営舎前に座して出入者の監視、営庭内の監視等を行う。夜間は閉門後営庭、外周内、重点地区、兵舎内外を巡回し、不寝者が営内にいないかその周辺等を巡回、経路を外れた時または時間中に週番士官の巡察が突然あるなどいつときの油断も怠けも許されない。

一人の居眠りや不注意で重大な事故に発展することになるので、いつときの過失も他に類を及ぼす故、衛兵の任務心得、綱領等は折あらば、休息時間も、その内容を棒暗記して、不時の出来事に対応する心構えを平素より養うよう教育された。

(内務教育) 内務教育は日常起居の間に覚えることであり、古兵が新兵に兵隊の一日の動作生活を身を以って範をしめす。また悪意で私的制裁を加える。打つ、殴る、蹴る等はすべてのことに認められず、私事の制裁として厳に戒められていた。日常生活は、大事なこと、何事も真面目にやれば必ず報われる。人のしたくないことを進んで行い、嫌がることも口より行動で示せ、陰日向の無い人間であれ、ということである。

以上は、私が軍隊入隊前に仕事仲間の先輩が教えてくれたことで、私の軍隊生活を左右した有り難い言葉で、今も忘れず地方生活の中で生かしている。

(班内の先任者田中兵長) この人は賢い人でした。洞察力があり、うそ、いつわりのできない眼力があり、班内をよく見ていた。入隊一週間を経た夜、初年兵を並ばせ一人一人名指して「お前たち軍隊に入隊した目的を答えよ」と言われた。同輩は答える。「お国のために戦死を覚悟で来た」

と「天皇陛下の御ため」と答えは決まっている。私の番が来た「答えが出ない」が思いきって答えた「私は軍隊が男子の修養道場と思つて来ました」と言うと「よし、力強い答えだ」と言つて、その後田中兵長は私を暖かく見て下さつた。

内務は階級よりも食事の飯の数がものを言う。三年兵が神様か、二年兵の兵長より三年兵の一等兵が幅をきかせるところ。勤務は階級、内務は飯の数それが当然とし存在するところである。下士官志願の任官者より古年兵が内務では顔が広い。

(給与) 朝、昼、夕、三食。

朝食は米麦混りの飯に味噌汁、煮物、漬物。昼食は朝食より若干良い。肉類が多く味噌汁は無し。夕食は昼食と同じ、総じて夕食が一番良く、寒い土地では豚肉が一日一回は必ず出て、大根漬けは必ず三度出る。

休日は昼食にパンと小豆の甘汁。土曜日には時々もち米に「ぜんざい」。別に入れて「おはぎ」にして食するような昼食も出た。初年兵は演習や

運動で腹がすく。与えられた給与だけでは足りないので古兵の残飯を頂く事もあった。

(被服) 夏衣上下、冬服上下。二装(外出用) 三装(平常着各一着ずつ) 他にネルの腹巻一本。冬期厳寒用として防寒帽、覆面外套が支給。また車両部隊なので別に作業衣二着、防寒作業衣・勝が支給。夏季は一切の防寒服は返納される。

(寝具) 毛織の毛布が総数九枚支給され、木綿の敷布上布、毛布覆と順に藁布団の寝台の上に敷いて寝る。休日ともなれば昼食後敷いて休息するのだが初年兵のときは一切横になるような時間もなく、また椅子に腰掛けるような時間さえもなく、一年間夕食点呼後、消灯時間までの約一時間、日曜日の午後の中の稽古のない時間が故郷への便りなどが書ける唯一の時間で、こうして初年兵生活の一年を過した。

幸いにも自分は体力も気力もあり、三年半後の終戦まで一日の欠席勤務もなく過すことができた。入隊前に農業及び労働体力を鍛えた賜物と思ひ苦

労だと思ったことはなかった。

昭和十七年三月末より、それまでは毎日営内だった訓練は四月に入ると銃を持って営外の二百メートルほど先の敷島台での演習となった。中央に立派な花崗岩製の「忠霊塔（砲弾型）」が建っていた。裏に建立者名として「大阪・坂口祐三郎同きね」と刻んである。この人の名前は香川県善通寺の金毘羅詣りの高い石段の途中に一万円、二万円、の寄付金に刻んだ石柱に立っていたのを思い出し、このような異国の土地にまで寄付しているのに感心した。後年、高野山詣りの際に立派な石碑が奥の院の入口に建っているのを見た（大和屋遊郭の主人）。春は菖蒲が咲きほこる敷島台は営外訓練に際しての第一の印象地だった。

西側にはロシアが東支鉄道を支配していたころの守備隊兵舎が森の中にあり、そこには戦車隊が駐屯し、九四式戦車が、毎日軌道を軋ませながら戦闘演習をやっていた。この第五三〇部隊の創立記念日（六月一日）に部隊が招待され、演芸会に

八木節等を観劇し、楽しい思い出となった。

また、この隊の北側に広い空地があつて昭和十七年秋ごろ、日本相撲協会の「安芸の海」ほか花形力士の慰問相撲を観る。敷島台より後の訓練は一般歩兵教練、射撃訓練、立撃、伏撃、片膝前進、両膝前進など約三カ月の教練を受け、六月末日一般教育の仕上げとしての一期の検閲を無事終了した。一期検閲が終わると七月より車両運転技術の教習となった。

車両運転教練

教官 馬場少尉 一、二班、消車助教助手同じ
教官 佐藤少尉 三、四、五班、除毒助教助手

同じ

消車は、軽装甲車九九式いすゞ陸軍相模造所製、除毒は、九四式六輪自動貸車いすゞ東京自動車工業製（現在関東自工）

教練には自動車工学を学び、第一に構造、第二にエンジンと技術的なことを学ぶ。自動車とは原動機を有し軌道によることなく路上を自由に走行

する車両を総称すると定義されている。運転技術も運転手、助手と区分し、乗車を合図に運転手は前方の始動ハンドルを持ち、始動の合図でチョーク、電源スイッチ、助手はハンドルをクランクシヤフト穴に差し込み運転手の合図で回転する。このとき始動の悪い車は汗を流してしまふ。学科で習得したようにクラッチ、変速レバー、ブレーキペダル、手動ブレーキの機能確認。

前進を合図に車間隔何メートルを守って前進、増進、減速を繰り返しながら技術を身に付ける。横にいる助教や助手から間違いがあれば注意され、また手旗の柄でヘルメットの頭をポカリと一打される。直行進ができるまでは、発進、停止、鋭角、側方転位等の基礎運行を十分学び、後に道路走行をする。

車両の教練場はロシア人墓地の南方の広場、または飛行場横の広場北方で基本的運転を約一カ月受け、その間に遠方の范家屯付近まで長距離教練を数回受ける。以後は応用教育となり、山越え、

川渡り、谷越えなどを八月中旬まで、すべて車両に関する運転技術を習得した。

(工手修業) 七月末ごろのある夜、週番士官室へ呼び出された。士官の馬場少尉が「信濃お前衛生兵にならないか」と問われた。いつときどつきりした。自分は「あのーという」と少尉は「あのーは駄目だ。地方語を出すな」と諭される。私は「はい、命令なれば仕方ありませんが、軍隊へ入る前、地方では一に衛生、二に喇叭、三に炊事のおぶり虫と言っており、なる気はありません」少尉「そうか、衛生兵は楽ができるし、進級も早い。これはお前が入隊する前から決めていたが、お前の気持ちも一応聞く必要があると思つて呼んだ。考え直すか」といわれたが、自分は「命令以外では衛生兵になりません」と答える。少尉は「ようーし、帰れ」「はい帰ります」と室を出る。

八月初旬、初年兵は一班から五班まで編成替えの大移動がなされた。自分以外三、四人が他の班へ、自分は第一班となる。軍隊生活第一歩に両側

に古兵にはさまれた田中君等同年兵とも室を別れる淋しさを残し第五班を去る。

班の編成替えの翌日から今度は装甲車の運転技術の教習である。皆よりの遅れを朝、夕、初歩より教官、助教、助手からの訓練を十日程度受け、装甲運転技術を身に付けた。これで両方の運転ができることとなり、大変有利であった。八月中旬、部隊命令で次の特業教育の命令がある。

自動車工手修業を命ず 浜田秀雄

戦車 斉藤照三

衛生兵 川口 弘

第五三〇部隊へ通勤教育である。

八月二十日より、多忙な朝の内務をすませ、遅れないように昼食の飯盒を提げて、隣部隊の第十二部隊よりの七人と共に引率され、森の中の戦車隊鍛工場へ行った。ここでは基本教育で火造り、鍛造、自動車エンジンの分解組立、調整等で、旋盤は材料廠の島野技士長による教育である。自動車全般は部屋秋雄兵枝曹長の教育である。戦車教

導隊三人を含む十二人は約三カ月の教育を受け、その間、部隊演習の修理隊として車載工具、旋盤使用などを備えた部隊の移動修理工場として参加し、検閲を受けた。

行軍演習地は伊通街道を東南進した。開拓団学校に一泊、大弧山北麓において行われた。

一応教育の成果を修め、十二月二十日、三カ月の修業を終わり、平素の勤務に帰る。その後、車廠勤務に就き、当番や週番を勤務した。自分たち特業教育を受けた者以外は、散毒、制毒を行う制毒隊として、敵が毒を撒いた戦場を通過するに必要な処置をする応用訓練を行った。

毒とは、一 磨爛ガス（イペリット ルイサイト）、二 中毒、三 窒塞、四 催涙等の総称で一般は防毒面をかぶりて防除するが、塩素、ホスゲン等の散毒地を通過する前には、消車で石灰を散布する。通過後の被服は除毒設備の整った蒸気室に入れて高温で除毒する。これらの行動をするには、自分の身を安全に覆うためすべてゴム製の

上衣、袴下、帽子、手袋、靴履などよりなる防毒衣服に身を固め作業する。これを身に着けると夏季などは苦しい作業となる。炎熱三〇度の原野の中、装甲板が焼けつく車内で、頭の先より足の先までゴム袋を覆つての運転、消毒作業では手袋の中、手の先まで汗がじゃぶじゃぶ溜まることがあり、終わって車外へ出ると頭がボーとしたことがあった。苦しい演習である。散毒演習を実施したこともあった。制毒班は制毒が本業であるので防毒面の着脱は三秒で行い、「ガスだ」の声に、非常訓練で起されたことが時々あった。

あるとき、器材庫において、学校本部の学生が大勢見ている中で、防毒器具などの説明を行ったことがあった。胸はどきどきでしたが大任を果たしたことを覚えている。一般歩兵以外の車両教育は、制毒教育を共に覚えることが多く、教育訓練に明け暮れる毎日であった。

(初年兵に対する特別訓話) 入隊後一カ月ほど過ぎたある日、部隊長代理の梶谷大尉の講話が

あった。『山はさけ 海はあせなん 世なりとも君に二心 我あらめやも』この歌は誰が歌ったか分かった者は手を挙げよという。誰も挙げない。自分が周囲を見ながら手を挙げた。「源実朝であります」「よしその通り」と言われ、そんな小さな事でも以後の方向に大きな意義があった。

(三年兵の満期除隊) 十二月に入ると、明けでも暮れても除隊の話。故郷より衣服を送って来る者、街で買って来る者、約九カ月を共にした古参兵との別れ、うれしい中にもまた悲しい思いである。

会うは別れの始めかと「嫌な古兵が 満期で見送る我らの胸の内」という歌そのままの気持ちで、十二月二十五日営庭に整列、除隊者を見送る。舎内に帰ると何となく森閑となった。

「早く二年兵になりたいなあー」が口ぐせの毎日であったが、明日からは自分たち二年兵四人、初年兵七人、どの班も皆静かなもの。翌年一月十日ごろに秋田県より二十人ほどの新兵が入隊する

と言う。新兵の入るまで我々の仕事は何も変わりなく、ただ食事、洗濯の数が今までより少なくなってしまうだけである。

戦局は急を告げ、南の島々や北辺から玉砕や全滅が報ぜられ、我が部隊も北と南に二分され、主力部隊は北へ、私たちは南へと、いよいよ別離である。

昭和十九年八月三十日、公主嶺の営舎を出発して、九月二日に山神府に到着、ここで対ソ戦に備えて訓練をしていた。

昭和二十年六月十二日、山神府を出発、通化に到着、ここで終戦を迎える。

九月一日に吉林省に集結、ソ連軍に武装解除され、九月二十九日、黒竜江を渡河し、十月九日イルクーツク収容所に収容される。昭和二十一年十一月十九日、マルタに移動、ここで山に連行され伐採作業を毎日やらされた。ここは今までいた南満とは違い、十一月下旬ともなると零下三五度の寒さである。ソ連兵の監視の下、毎日伐採作業を

昭和二十二年三月二十四日まで行い、二十五日に山を下り、四月三日マルタ出発、四月十二日ナホトカへ出発する。

約一年半ぶりに待ちに待った復員の日が来たのでした。その間、苦楽を共にした幾多の戦友はあの厳寒の地で命を落としたのでした。

昭和二十二年四月二十九日、その日は日の丸をつけた日本の船がナホトカの港に静かに横になっていた。そして青色の日本海が初夏の陽光に映えて、それはまるで絵のように美しかった。

タラップを駆け登るみんなの力強い足音、私も一挙にかけ上がった。ああこれで我々はこの地獄の大陸から離れて日本管轄に入ったんだ。もう連れ戻される事もないし、苛酷な重労働も強制的な民主教育もない。船は静かに岸壁を離れた。自分は甲板の鉄柵によりかかりながら次第に遠ざかっていく、ナホトカのなだらかな丘陵をいつまでも眺めていた。

三年余りのシベリアでの抑留生活、祖国日本へ

の「ダモイ」をひたすら夢見続けた日々、やせ衰えて無念の涙を浮かべながら死んでいった戦友の姿、もう絶対に二度と来たくない恐怖の土地ではあるが、それでも何かしらちよっぴり懐かしくもあつた。

輸送船は心地好いエンジンの音を響かせながら祖国日本へとまっしぐらに突き進んでいる。もういつの間にかナホトカの街は水平線の向こうに没して去っていたが、私は何回も自分の身体をつねって見て「夢ではないだろうなあ。うそではないだろうーなあ」と思っていた。

昭和二十二年四月三十日、船は舞鶴港に入港、翌五月一日上陸、復員手続きを終了後各人再会を約して各郷里へと向った。焼土と化した郷土の街、それでも家族は皆無事で迎えてくれた。

あの日あるとき「歳月は忘却の藁」と言われるように、苦しみも悲しみも歳月の経過と共に自然に風化してしまうものである。

今、あのシベリアの絶望と屈辱の日から六十余

年が過ぎて、いかなる好運か、我々は健在で何に不自由なき繁栄の中に生きている。しかしこの好運がいつまで続くだろうか、誰も保証はできない。歴史は平和と退廃が必ずおとづれる。戦争の悲劇が私たちに教えている。

戦争ほど悲惨で残酷なものはない。今でもテレビに映る「中国残留孤児」の悲痛な叫びが私たちの耳たぶを打ちあまりにも深い戦争の爪跡は深い悲しみの涙を流している。

だからこそ私たち戦争体験者の一人一人が戦争を知らない子供や孫たちに、悲惨で残酷な戦争の実体を伝え「二度と起こすな戦争を」のために残り少ない余生を燃焼すべきであろう。

またそれが異国の丘や南海戦線、大陸戦線に散った亡き戦友に報いるたった一つの道であるような気がする。永遠の平和であることを祈念して。